

## 京都新城

京都新城は太閤豊臣秀吉が関白豊臣秀次の聚楽第を破却した後に、豊臣関白家の正式な邸宅として慶長2年（1597年）京都御所（禁裏）東南に構えた豊臣秀頼のための城郭風邸宅でした。秀吉の逝去後は、秀頼は短期間利用した後は、大坂城を常の住居としたため、秀吉の正室である高台院（北政所）とその養子となった羽柴利次が住居として用いたのみであります。

京都新城とは現在になってからの呼称であり、当初は太閤御屋敷、太閤御所、太閤上屋敷などと呼ばれ、やがて、新城秀頼郷御所、京の城と呼ばれたのです。慶長2年（1597年）正月末から関東の諸大名を動員して下京東部地域に新しい城の普請が始められました。しかし、4月には禁裏東南の地、藤原道長の土御門京極第の跡地に変更されました。普請は5ヶ月ほどで完成し、9月には秀吉と秀頼が滞在、太閤御屋敷と呼ばれたのです、9月27日秀頼はここから参内して元服し、初めて従四位下左近衛少将に叙任されています。秀吉が伏見城で亡くなると、家督を継いだ秀頼は新城には住まず、秀吉の遺命により大坂城に移りました。慶長4年（1599年）9月高台院が大阪からこの新城に移居したので以後、高台院屋敷郷と呼ばれました。

関ヶ原の闘い以後も高台院は住み続け晩年には、甥の木下利房の次男、利次を養子にとり羽柴利次と称させました。寛永元年（1623年）高台院が没すると木下利房（宮内少輔）が跡を継ぎました。さらに、寛永4年（1626年）後水尾天皇が譲位の意向を示すと、幕府より仙洞御所の敷地に選ばれ、建物はすべて解体され、跡形もなくなったのです。当時の常として、御所建設に先立ち撤去された建物は市内の寺院や公家屋敷などに残されたと思われます。記録地誌などは一切見当たりません。ただし西本願寺から墨書が発見され、西本願寺の国宝唐門や醍醐三宝院の国宝唐門も京都新城の関連建造されたものと思われています。

2020年、京都仙洞御所での発掘調査で石垣と堀跡の遺構や金箔が付いた瓦が見つかりました。2023年には石垣の遺構が発掘されました。





